

いなかおか VII



2002 No.143

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XV

下馬部会 斎藤 賢一

今回は前回の中部ジャワに引き続き、東部ジャワの仏教・ヒンドゥー教遺跡を見学したいと思います。東部ジャワとは、あまり聞き慣れないと思いますが、ジャワ島の東に位置し、インドネシア第二の港湾商業都市スラバヤを持つ地域です。このスラバヤの南に聖山ベナンゲンガン、ウエリラン、アルジュナなどを中心に、これら聖山を一周するようにブランタス河が流れています。そしてこのブランタス河一帯に、10世紀から15世紀の仏教・ヒンドゥー教遺跡が点在しています（図-1）。



図-1 「東部ジャワの遺跡」ポロブドール遺跡めぐりより

10世紀になると政治の中心が、中部ジャワからこの地へ移ります。原因は、火山の噴火、疫病の流行、東部ジャワの商業的繁栄など諸説ありますが、ここに東部ジャワ美術が開花します。この美術の特徴は中部ジャワ美術がインド文化からの模倣的性格が強いのにに対し、インドの影響が弱くなり、代わりにジャワ独自の土着的性格が強くなります。インドからサンスクリット語で伝えられた二大叙事詩「ラーマヤナ」「マハーバーラタ」も古代ジャワ語で翻訳され、またジャワ独自に脚色され、「アルジュナ・ウィワーハ」「クリシュナヤナ」などジャワ独自の物語も作られました。これらの物語を題材にした浮き彫りが、ジャワに伝わる影絵人形を思わせる作風で寺院の壁面に、空白を残さず人

物などで埋め尽くされる様式で彫刻されています。寺院（チャンディ）の特徴は、中部ジャワ期のものより規模が小さくなって、仏教とヒンドゥー教の混合がより強くなっています。東部ジャワ期の遺跡は、中部ジャワ期のもの（7～10世紀）、クディリ王朝のもの（10～13世紀初め）、シンガサリ王朝のもの（13世紀初め～終わり）、マジヤピト王朝のもの（13世紀終わり～15世紀中頃）に分けられ、これら王朝もブランタス河に沿って移っていきます。それでは古い順に遺跡を見学いたします。

中部ジャワ期の遺跡は、政治の中心が中部にあった頃から、ここが重要な地域であったことを物語っています。まずはマラン市から車で山に向かって30分ほど登っていくとソングリティと言う温泉町があります。ここは全く日本の山間の温泉郷そっくりで、日本語で書いてあれば間違えそうです。この温泉街の中にC. ソングリティと言うシヴァ派の小さな寺院がありますが、ほとんど崩れています。9世紀に建立され、先程述べたようにここは宗教的に何か特別な場所であったと思われます。

マラン市の郊外にC. バトウがあります。この寺院は東部ジャワ期の一番古いシヴァ派の寺院で、中部ジャワでお話したディエン高原の遺跡と同じ時期で、寺院形態も、入口にあるカーラ・マカラの彫刻、壁面のドゥルガーの彫刻



写-1 「バトウ」

も良く似ています（写-1）。

次にクディリ王朝時代の遺跡を見学に行きます。まずは聖山ペナンガン山の東斜面にある、エルランガ王の霊廟の一部である沐浴場C、ベラハンです。ここは案内書によると、マランの町から山の麓まで行き、そこから徒歩で1時間登らなければならないと書いてありましたが、覚悟して行きましたら、なんとドライバーは急な細い山道をどんどん登っていき、遺跡の前まで行ってしまいました。沐浴場であるベラハンは今も、この山の村人の生活用水として用いられ、飲料水として、洗濯場として、沐浴場として、次から次に村人がやってきます。バリ島でお話した、ゴア・ガジャの沐浴場にとっても良く似ています。このことはジャワ島とバリ島とはとても緊密な関係にあったことがうかがわれます。正面右側の女神像がラクシュミー、左側はシュリーで共にヴィシュヌ神の妃であります（写-2）。中央にはクディリ王朝4代エル



写-2 「ベラハン」ラクシュミーとシュリー

ランガ王を基にして造られたヴィシュヌ神像がありました。現在は博物館にあります。

C、ジョロトウンドはこの反対側の西斜面にあり、ここもエルランガ王にゆかりの沐浴場



写-3 「ジョロトウンド」

です。案内書によるとここも1時間ほど山道を歩かなければならないと書いてありましたが、現在は道が良く遺跡の前まで行けます。とても変わった沐浴場で、この下に貴人が埋葬されていました（写-3）。この霊水沐浴場と言う形式のモニュメントは東部ジャワとバリ島にしかありません。

ゴア・セロマングレンは10世紀末の岩窟寺院でトルングアグンの町からワジャク山に向かい、麓から歩いて畑や林を抜け坂道を少し登ると岩窟が見えてきます。入口はバリ島のゴア・ガジャと同じくカーラが彫刻されています。内部は深くなく、後でお話する、「アルジュナウィワーハ」の彫刻が掘られています（写-4）。



写-4 「ゴア・セロマングレン」アルジュナウィワーハの彫刻

シンゴサリ王朝の見るべき遺跡は3カ所あります。マラン市から北に15Kmの所にC、シンガサリがあります。他の寺院との違いは正面に2つの小さな壁龕と他の3面に入口のある大きな壁龕があり、いぜんお話しした中部ジャワのC、ロロジョングランと同じでそれぞれにグル、ガネーシャ、ドゥルガーの素晴らしい彫像が安置されていましたが、グル像を残して、他はオランダが持って行ってしまいました。この見物はすぐそばにある巨大なドゥバラパーラ（門神）です。中部ジャワのC、セウ（遺跡の旅-写-10）で見たものよりはるかに大きく4mはあります（写-5）。C、キダルは東部ジャワ期のプロトタイプでマラン市の郊外にあります。東ジャワ期建築の特徴の一つは、入口のカーラで中部ジャワ期までは下顎が有りませんが、東部ジャワ期になると下顎が付き、顔もデフォルメさ



写一五 「シンガサリ」ドゥパラパーラ



写一六 「キダル」全景



写一七 「キダル」アムリタの壺を運ぶガルーダ

れてきます(写一六)。C. キダルの基壇には「マハーバーラタ」から作られたガルーダの物語「ガルディア」の彫刻があります。蛇(ナーガ)の一族の奴隷とされている母を救出するための身代金として、ガルーダがインドラ神から不老不死の霊水アムリタの入った壺を盗み出す冒険物語で、母を運ぶガルーダ、蛇を運ぶガルーダ、アムリタの壺を運ぶガルーダが彫刻されています(写一七)。

ここから15分の所にC. ジャゴがあります。C. ジャゴは仏教とヒンドゥー教のシヴァ派が一緒になった寺院で三層の基壇に彫られている彫刻が見事です。第一基壇には「クンジャラカルナ物語」が、第二基壇には「パールサヤジュナ」、第三基壇には「アルジュナウィワーハ」が彫刻されています。「クンジャラカルナ物語」は仏教説話で「主人公の夜叉クンジャラカルナが毘盧遮那仏に教えをこい、更に地獄界の閻魔大王に面会する。閻魔大王はクンジャラカルナの義理の弟にあたるプールナヴィジャヤが、やがて地獄にやってきて、地獄の釜の中に入れられ、10万年間、煮られることを告げる。クンジャラカルナは弟を助けるために、そのことを弟に告げる。弟は驚き、兄の紹介で毘盧遮那仏のもとで教えを授かる。その上で、自分の罪を消すために地獄界へとおもむき、地獄の釜の中に入ると、わずかに九日間で釜から出られることになる。それはなぜかと毘盧遮那仏に聞くと、仏に会い、仏の教えに耳を傾けたからだ、といわれる」。説話の中で地獄の釜は牛の形をしていると述べられていますが、基壇の浮き彫りも牛の形をしています(写一八)。また境内には不空罽索観音などの、密教の彫像などが有ります。



写一八 「ジャゴ」牛の形をした地獄の釜

モジョパイト王朝の遺跡はブリタール市から車で15分ほどの所にある中心的寺院C. パナタランから始めます。ここは東ジャワで一番大きな遺跡で、広い駐車場があり、参道にはおみやげ物屋も並んでおり、多くの地元観光客でにぎわっています。1347年建立で本尊はシヴァ神です。たくさんの建物がありますが、この中で屋根の頂部まで完全に復元されているC. タンガルと言う建物は重要です。入口上部のカーラも東ジャワ独特の下顎付きのもので、その下に建立年月日が書かれています(写-9)。その奥にあるC. ナーガと言う建物も、上部をナーガ(蛇)がとりまいており、これを9体の神像が支えているユニークなものです。一番奥にある主



写-9 「パナタラン」C. タンガル



写-10 「パナタラン」主堂、ラーマヤナの彫刻

堂の第一基壇の側壁には、植物文様の中に色々な動物を彫ったメダリオンと「ラーマヤナ」のパネルが交互に配されており、私がジャワ島で一番好きな彫刻です(写-10)。第二基壇の側壁には「クリシュナヤナ」、つまりクリシュナとその妻であるルクミニの恋愛物語が彫られています。第三基壇の側壁は、有翼のシンハ(獅子)と有翼のナーガで飾られています。更に奥に行ってみると沐浴場があり、ここの壁にも亀、ワニ、牛、鹿などの動物や、狩人が彫刻されています。

次にクディリ市から車で30分の所にC. ティゴワンギとC. スロウォノがあります。C. ティゴワンギで見るべきは基壇の側壁に彫られた「スダマラ物語」です。この物語は「マハーバーラタ」の主人公であるパンダヴァ家の5兄弟のなかのひとりスダマラに関する物語で、シヴァ神の妻ウマーが死の女神ドゥルガーに変身させられてしまっている時、スダマラが彼女をその呪いから解き放してもとのウマーに戻すまでの、様々な出来事をテーマにしています。この題材をととても魅力的に彫刻しています(写-11)。この建物は未完成で北側の面にはなにも



写-11 「ティゴワンギ」スダマラ物語の彫刻

彫刻されていません。C. スロウォノはここからすぐの所にあります。建物はC. ティゴワンギにとっても良く似ており、第一基壇には28枚のパネルに動物に関する寓話、笑話、などが彫られています。第二基壇には「アルジュナウィワーハ」、「ブブクシャー物語」、「スリタンジュン物語」が彫刻されています。「アルジュナウィワーハ」はスダマラ物語と同じように、「マハーバーラタ」の一部からジャワ風に創作された

物語で、パンダヴァ家の一人アルジュナが主人公で、彼は聖者であり、離欲とヨーガとの功德の積み上げによりインドラ神から信頼され、またシヴァ神から特別な矢をさずかり、天界からの天女の助けによって悪魔王ニワカワチャを殺害するという物語です。浮き彫りは空白を見ないほど人物や図柄で埋め尽くされています(写-12)。「スリタンジュン物語」の彫刻もす



写-12 「スロウオノ」アルジュナウィワーハ、シヴァ神とアルジュナ

ばらしく、ヒロインのスリタンジュンが大魚の背に乗って溪流を渡る彫刻は特筆ものです(写-13)。

最後にモジョバイト王朝のあったトロウランへいきます。この都市跡には入口にC. ウリンギン・ラワンと言うバリ島に見られる割れ門と同じ大きな門があります(写-14)。C. バジャン・ラツウも門の跡です。C. テイクスは霊水沐浴場でとても面白い形をしています。トロウランの墓地にマジャパイトの王に嫁いだチャンパ(ベトナム)の女王の墓があります。またここから車で2時間ほどの所にC. バリの遺跡があります。ここの特徴は東ジャワ建築ではなく、チャンパのヒンドゥー教祠堂の影響が見られることです(写-15)。これらにより東ジャワとチャンパの親密な関係が解ります。

ほとんどの旅行者は中部ジャワまでしか行きませんが、スラバヤはインドネシア第二の都市で初代大統領スカルノの出身地であり多くの政治家を輩出した地であります。スラバヤの町は都会であり、所々にオランダ時代のコロニアルな建物も残っています。もしここに宿泊するならば「ホテル・モジョバイト」に決まりです。



写-13 「スロウオノ」大魚の背に乗るスリタンジュン



写-14 「ウリンギン・ラワン」割れ門



写-15 「バリ」チャンパ建築の影響が見られる

とても古いコロニアルなホテルを、外観は変えずにマンダリンオリエンタルがリニューアルした高級ホテルです。東ジャワの遺跡めぐりにはスラバヤからブランタス河に沿って、マラン、ブリタール、クデリィと宿泊して廻るのがよいでしょう。時間がありましたらテレテスと言うペナングガン山に近い高原の町も涼しくて快適です。ここは軽井沢のようなところで、スラバヤのお金持ちの人々の別荘があるところです。東ジャワの食べ物は中部ジャワのように甘くなく、日本人に良くあうと思います。ナシゴレン（焼きめし）やサテ（焼き鳥）もあっさり

しており、サンバル（とうがらし）とトマトをすりつぶしたものをつけて食べれば最高です。マランの町では行列が出来るソトアヤム（とりスープご飯）、モジョケルトの町では行列が出来るオックステールライス（コムタン）が最高でした。

東ジャワはとてものどかなところで、観光するところがあまりないため、ガイドブックにもほとんど載っていません。ブランタス河に沿って聖なる山々の周りを回ると、この地域自体が自然の曼陀羅であることを実感いたします。